

タイトル	ジョン・ラスキンについて
著者	川上, 武志; KAWAKAMI, Takeshi
引用	年報新入文学(13): 2-5
発行日	2016-12-25

ジョン・ラスキンについて

川上 武志

ここ十年ばかりの間によく顔をだす学会に「ヴィクトリア朝文化研究学会」というものがある。今年で十六回目の開催になるというからまずは新興の学会である。名称に「文化」と銘打つだけあって、研究発表やシンポジウムや講演で取りあげられるテーマは、歴史、思想、宗教、経済、文学、絵画・彫刻、建築、工芸などの諸分野にわたり、まさに学際的な議論が繰り広げられる学会である。それこそ百花繚乱といった風情であるが、そのことがかえって英文学だけを専門とする門外漢の興味をかきたてる。

学会名の頭にある「ヴィクトリア朝」というのは、英国史におけるヴィクトリア女王の統治した期間（一八三七～一九〇一）のことであるが、レッセ・フェールを旗印とした自由貿易主義体制のもとで、大英帝国が未曾有の産業の興隆を誇った時代である。そしてその覇権を確立していったのは、ヴィクトリアン・ミドルという階級に位置づけられる人々であった。だがこの時期に開催された「ロンドン万国博覧会」が象徴する、鑄鉄ときらびやかなガラス張りの「水晶宮」には、じつは暗い影の部分があった。

前世紀から加速された産業革命は、工場建設や鉄道敷設などの開発によって、英国の自然をますます破

壊していったのと同時に、「困い込み」で土地を追われた農民を安価な労働力として呑み込んでいったからである。もちろんこういった状況に異議を唱えるものもいた。それは自然のなかに「遍在する神」を感得した「ロマン主義者」たちであったが、神性をその背後に潜ませる自然に、人間性の回復を求めた彼らの声も、安直な産品を大量に作りだす機械の騒音にかき消されていった。

さて話は、数年前の「ヴィクトリア朝文化学会」でのことである。あるシンポジウムの議論のなかでジョン・ラスキンのことが話題となった。最初は美術評論、後に社会批評に健筆を揮うラスキンの生涯は、ほぼヴィクトリア朝と重なっている。彼の出自は父親がシェリー酒の売買で財を成した実業家ということ、ヴィクトリア朝の指導者層であるアップパー・ミドル・クラスに属している。ターナーの風景画を擁護した、二十代前半の著作『近代画家論』でのラスキンの眼差しは、ロマン派の詩人と同様に自然に向けられた。そこで彼が説くのは、画家が自然に向かうときに、その景色をたんに機械的に模写するのではなく、そこに啓示される神の意思を伝達する表現形式を求めなければならない、また鑑賞者にとつても、そこに「偏在する神」を看取するためには、想像力を働かせなければならないということであった。またラスキンはこのようにも説いた。産業による自然の破壊は人間の破壊を意味し、畢竟するに芸術の破壊につながるのだと。

くだんのシンポジウムのなかで、ラスキンの『近代画家論』の有名な箇所が取りあげられた。まずラスキンがヴィクトリアン・アップパー・ミドルの驕奢な社交に明け暮れる生活を批判した後で、「人間にとつてのあらゆる真の健全なる喜びは……まさしく可能であったのだ……妻が生長して花が実を結ぶのを見守ること、鋤先や鋤で仕事して激しく呼吸すること、読書すること、考えること、愛すること、

祈ること——これらが人間を幸福にするのである・・・世界が繁栄するか困窮するかは、我々がこのようなわずかなことを知って教えることに係っているのであって、けて鉄、ガラス、電気、蒸気に依存しているのではない」と語るところである。ここでパネリストの一人が、「ほかならぬラスキン自身も鉄、ガラス、電気、蒸気の恩恵を受けているではないか。だからこのような中世然とした生活などできるはずもないし、ナンセンスだ」と一刀のもとに切り捨てたのである。この発言に少々の驚きを感じたことをよく覚えている。というのは以前にこの箇所を読んで心を動かされることがあったからである。引用したラスキンの言説は、体制派内にいる人間であるからこそその鋭い反対体制派的な批判となっている。時代錯誤とかアナクロニズムであるとしたこのパネリストの発言は、ラスキンと同時代のほとんどのミドル・クラスが一斉に浴びせたのと同じ痛罵であった。これぞまさしく中世への回帰というドン・キホーテさながらの夢だと。だがスノビズムの権化たるミドル・クラスは、その贅沢な暮らしぶりをいったいだれの犠牲によつてできたのであろうか？そこにはラスキン良心がかかっていた。また道德の問題でもあった。

絵画から建築に目を転じたラスキンは、社会との関わりから芸術を理解しようと試みた。彼がベネチアの建築に見たものは、芸術に関与する人間の労働には、喜びが表現されているということであった。人間には労働が喜びである時代があったのだ。だから近代のように労働が金銭のみを目的とするのではなく、労働を喜びとすることは可能なだと主張する。また彼がベネチアで発見したものは、人間味に溢れる職人による手仕事であった。その手仕事に見られる職人芸がなくなったのは、機械が生み出す分業による安手な大量製品の氾濫がその原因であり、必然的に人間と労働との真なる関係の希薄化を生じ

させたのだ。このようにラスキンは手仕事による労働の魅力の意味を強調したのだが、現在の我々が、量産される規格品より、手作りの品に人間的な温かみを感じるのは、ラスキンの衣鉢があるからである。

散々な批判を浴びながらも、後年のラスキンがなおも告発したのが、機械の奴隷となつてマモンの神を崇拜するヴィクトリアンの姿であつた。彼はつねに人間というものを中心においたヒューマニストであつた。ヒューマニズムの観点からラスキンは、文化と経済を分離させ、また物欲のみを優先させるだけで、豊かで雅趣ある文化の実現を困難にする資本主義社会は、人間精神にとつていかなる意味をもつのかという問を突きつけた。この問は我々にとつても座視できないものである。というのは二十一世紀の現在の社会状況も、本質的には百五十年前のラスキンの時代と変わっていないと考えられるからである。ラスキンが提示したこの問は、グローバル化などによつてますます貧富の差を拡大させつつある現在の高度（？）に発達した資本主義社会にも突きつけられているのである。

（かわかみ たけし・北海学園大学人文学部教授）